

# 軍事技術者の イタリア・ルネサンス

— 築城・大砲・理想都市 —

白幡俊輔著

思文閣出版

## 目 次

序 章 軍事技術とルネサンス期イタリアの社会	3
第1章 ルネサンス期イタリアの戦争・武器・傭兵	13
はじめに	13
第1節 15世紀までのイタリアの軍隊と戦術	14
第2節 火器と築城術の特徴	27
第3節 15世紀イタリア傭兵隊長の戦術改革	37
小 結 傭兵隊長の2つの側面	54
第2章 フランチェスコ・デイ・ジョルジョの城砦設計と「戦術」	63
はじめに	63
第1節 フランチェスコ・デイ・ジョルジョの城砦：マルケの事例	64
第2節 フランチェスコ・デイ・ジョルジョの城砦：ナポリの事例	84
小 結 「重点防御」：フランチェスコ・デイ・ジョルジョの特徴	104
第3章 ルネサンスの築城術における合理性追求と古典再解釈	111
はじめに	111
第1節 フランチェスコ・デイ・ジョルジョの都市計画：ウィトルー ウィウスとの比較	112
第2節 軍事的合理性：火器に対する防御と「側面射撃」	118
第3節 古典再解釈による築城術の変化	129
小 結 「築城術」に秘められた論理	144

第4章 都市防衛を超えて：16世紀の築城術	152
はじめに	152
第1節 バルダッサレ・ベルツィ：16世紀の「マルティーニ派」	153
第2節 「稜堡式築城」の成立	165
小 結 築城術の転機	183
第5章 築城術と「国家の防衛」戦略	187
はじめに	187
第1節 「都市の防衛」から「国家の防衛」へ	188
第2節 マキアヴェッリのフィレンツェ城壁改修計画：政治思想家 の築城術	203
小 結 国防戦略を担う築城術	219
終 章 軍事技術の変遷がもつ歴史的意味	227
資料篇	233
参考文献一覧	258
図版出典一覧	268
あとがき	
索引(人名・地名・事項)	

## 軍事技術者のイタリア・ルネサンス

### ——築城・大砲・理想都市——

## 序 章

### 軍事技術とルネサンス期イタリアの社会

ルネサンス期のイタリア社会を理解するうえで欠けているのは、「軍事」という面からこの時代をみる視点ではないだろうか。戦争は人類の社会に大きな被害をもたらすものであるが、その一方で人類史に多大な影響を与える要因となってきたことは否定できない。それゆえルネサンス期の社会への考察も、「軍事」や「戦争」という視点を欠かすことはできない。本書はそうした動機に基づき、とりわけ軍事「技術」という観点から、ルネサンス期イタリアにおける戦争と社会の関係を考察しようとするものである。具体的には、15世紀から16世紀にかけてイタリアで活躍した建築家が残した建築書と、彼らの活動から、ルネサンス期のイタリアにおける軍事技術の発達・変化と、建築家たちの軍事戦略思想の変遷の解明を試みている。

軍事技術とは当然ながら、敵対者の攻撃から自分や味方の身を守り、相手を殺傷するためのものである。自分たちの命や利益が懸かった場で用いられるのだから、軍事技術は使用者によって常に可能な限り合理的に選択され、より効率的になるよう考案されてきたと考えられている。だが、本当にそうした単純な原則に従って軍事技術は発達してきたのだろうか。軍事技術には、合理性や効率性の追求には収まらない、人間の思弁的な営みや先入観、社会通念といった、人間的な感情を交えた精神史が隠されている。

そのような観点から、本書ではこれまで軍事技術史でとりあげられてこなかった、いわば非合理的な側面に注目する。とくに軍事技術の効率化・性能向上とは一見無関係な、ルネサンス期のイタリア人建築家が持っていた社会的常識や思想上の規範によって、当時の軍事技術の発達がどう影響されたのか

を解明する。

本書が対象とする時代において、とりあげるべき軍事技術とは、「火器・大砲」と「築城術」に尽きる。火器および大砲は、14世紀にはすでにヨーロッパの戦争で用いられていたが、15世紀以降急速に普及し、とりわけ城砦を攻略するための「包囲戦（英語では siege、イタリア語では assedio という）」における攻撃側の主要な兵器となりつつあった。一方、この「新兵器」の登場によって、これを防御するために城砦・塔・城壁などの設計法「築城術」も、これに対応した変化を求められつつあった。当時のイタリアで、火器や大砲の攻撃に対して築城術を改良し、実際に城砦を建設したのは建築家 architetto であり、同時に火器や大砲の設計・製造や、砲術といった分野を考察・研究していたのも建築家であった。つまり、この2つの軍事技術の主たる担い手はともに「建築家」と呼ばれる人びとであった。さらに、「火器・大砲」と「築城術」は15世紀から16世紀にかけて戦場の主役となつて、急激な普及と改良がもたらされたというだけでなく、その後の戦争の様相を変化させた技術だった。

火器の発達は、「歩兵(小銃兵)」と「砲兵」という近代軍隊の根幹をなす兵科を生み出した。さらにこれらの優れた武器は、少数のヨーロッパ人による他地域への拡張（いわゆる「大航海時代」の到来と、植民地獲得競争）を可能にした。

一方、築城術の改良は、ヨーロッパ地域と、ヨーロッパ人のアフリカ・アジアの入植地域を防御しただけではなかった。堅固な城砦の登場は、軍事作戦の長期化と軍隊の大規模化をもたらし、大砲の攻撃に対応した築城術はその建設にこれまでとは比較にならない莫大な資金を必要とした。こうした軍備によってひきおこされる財政圧力は、各国の財政システムならびに政治システム<sup>1)</sup>に変化を促し、中央集権的な近代国家制度を生み出したと主張する研究者もいる。

以上のような軍事技術がもたらした世界史的な変化を広範囲に検討することは、筆者の能力のおよぶところではなく、また本書の目的ではない。だが、

15-16世紀の「火器・大砲」と「築城術」は、単に軍隊と戦争のあり方を変えただけでなく、さまざまな分野にわたって、中世から近代への分水嶺であった可能性があるのである。そこで本稿では、軍事技術の近代化そのものを考察すると同時に、「火器・大砲」と「築城術」によってもたらされた「近代への分水嶺」として、こうした軍事技術の改良を担った建築家自身の軍事技術や戦術・戦略に対する思想の「近代化」について考察する。

軍事技術の近代化といっても、その歴史を直線的な発達として理解することは本稿の目的ではない。ルネサンスの火薬と戦争の関係を考察した技術史家バート・S・ホール Hall は、「技術史家は技術そのものを、その論理を用いて解明することに専念する。一方軍事的な事柄にかかわる歴史家は、経済史家や社会史家にならって、技術を『ブラック・ボックス』、つまり入力と出力は知ることができるが、内部の働きはそれ自体何の関心も引かないシステムとして扱うほうを選ぶ」と、軍事史家の技術への姿勢について批判している<sup>2)</sup>。本書は建築家と築城術を主なテーマとして扱うが、こうした批判を受け止めたうえで、築城術自体の働きを、具体的に検討していく。

ルネサンスの築城術は軍事技術とだけではなく、とりわけ「理想都市 *città ideale*」論と深い関係を持っていた。理想的な都市は、外敵から防衛するため、そして都市領主の身を安全に保ち統治を容易にするために、最上の防衛力を持った城砦および都市城壁を必要とした。あらゆる点で理想的な都市とは、防衛面でも難攻不落の城郭都市でなくてはならなかった。また、都市内部の治安を維持し、領主の身を守る手段としての城砦は、理想都市に欠かせない設備であった。だがいうまでもなく、理想都市を設計するうえで、全ての機能と資源を「城砦・城壁」に費やすことが許されたわけではない。建築家は理想都市を設計する上で、住民や領主の安全以外に、利便性や公衆衛生、美的要素などさまざまな要素を考慮していた。そうした観点から本書で注目したのは15世紀シエナの建築家フランチェスコ・ディ・ジョルジョ・マルティーニ Francesco di Giorgio Martini である。この日本におけるルネサン

ス研究ではほとんどとりあげられることがない建築家・軍事技師の事績を追跡することで、新たな視野が開けてきた。

それは、火器という新しい武器が登場した後になっても、理想的な城砦を設計するさいには軍事的な関心以外の要素が盛り込まれ、しかもそうした要素によって築城術の方向性が左右されていたということである。ルネサンス期のイタリア人建築家で、「火器の攻撃から防衛することが今後の築城術の課題である」と最初に認識した人物であるフランチェスコ・ディ・ジョルジョですら、ただ防御・防衛力の観点のみならず、理想的な城砦と都市は人体を模倣すべきであるという信念を持っており、それを実際の建設の場でも実行していた。これは古代ローマの建築理論家ウィトルウィウスが唱えたシムメトリア *symmetria* とは異なり、建築物の全体および各部分の比率を人体から導き出すということではない。都市や城砦を人体との比較で説明するとは、文字通り人体と都市および城砦が形状的に模倣されることであって、そこにはアントロポモルフィズモ *Antropomorfismo* つまり「擬人論」「神人同形説」に従って人の形をした都市や城砦を築こうという意思が働いていた。

ところが、16世紀以降の建築家が建築書の中で提示し、実際に建設した城砦や城郭都市は、幾何学的な平面プラン・直行する街路・整然と配置された街区など、初期のルネサンスの建築家たちが夢想した「理想都市」としての側面も備えているものの、その多くは純粹に軍事的な「要塞」として建設されたという面が強い。これら16世紀以降に建設された城砦や城郭都市は、多角形の城壁をもち、その周囲を「稜堡 *bastione*」と呼ばれる堡塁を多数配しており、こうした様式の城砦を「稜堡式築城」あるいは「イタリア式築城」と呼ぶ。「稜堡式築城」を備えた都市では、その城壁は敵の砲兵隊による包囲攻撃に対抗することを第一義的に設計されており、以前の建築論にみられたような、都市に快適さや美的外見を与えるための城壁という考えは全くみられなくなる。城壁が軍事目的に特化したように、「稜堡式築城」の都市機能も、住民のためというより、貧弱な補給能力しか持たない当時の軍隊が駐

屯するためのものとなっていく<sup>3)</sup>。

だが、16世紀以降に建設された「稜堡式築城」で要塞化された都市はただ軍事目的に特化したものにすぎないのだろうか。そして、単に「理想都市」論の軍事要素以外が後退したものであると考えていいのだろうか。ルネサンス期のイタリア人建築家たちは「理想都市」を考察する一環として、軍事技師として実戦に対応することを強いられていたはずである。たとえば、前述の建築家フランチェスコ・ディ・ジョルジョが、擬人論的都市・城砦を理想的な形として提示する一方、「火器に対する防衛」を城砦の第一義的機能であると認識した建築家であることを忘れてはならないだろう。彼は火器は既知の武器の中で最も強力で、将来にわたって城砦の最大の脅威になると主張しつつ、擬人論に従って人の形を模倣することで理想的な防御力をもった城砦が建設できると述べるなど、技術への合理的な態度と非合理的な態度が同居していた。こうした相反する態度は他のイタリア人建築家にもみられるものであり、これこそ築城術発達の原動力であった。それゆえ、「擬人論」と「火器に対する防衛」の2つの思想が、フランチェスコ・ディ・ジョルジョの築城術でいかに対立・融合していたのかという点は、ルネサンスの築城術を考察するうえで重要な問題である。

15世紀までの築城術と比べると、16世紀以降の築城術では、確かに軍事的機能が突出して重視されているようにみえる。だが、そこには幾何学的に対称な多角形プランといった「理想都市」論的な要素が大枠として生き残り、そうした要素を建築家たちが完全に捨て去っていたわけではないことを示している。つまり、重点がどちらに置かれたかは時代ごとに変化したとしても、この2つの要素はむしろ築城術の中で常に存続していたのではないだろうか。

そこで本書では、築城術の「理想都市」と「軍事的機能」の2つの要素が、相互に影響をおよぼし重点を変えながら、フランチェスコ・ディ・ジョルジョの擬人論的城砦から16世紀の「稜堡式築城」に向かって、変化・改良されていく過程を論述する。

しかし、イタリア・ルネサンスの軍事技術というと、どうしても弱体であったというイメージが付きまとう。それはおそらく1494年のフランス王侵攻が原因だろう。1494年、それまでポテンターティ *potentati* と呼ばれる強国間のバランスの上に繁栄を謳歌し、ルネサンス文化を育てていたイタリア半島にフランス王の軍隊が襲いかかった。フランス王シャルル8世が、かつてフランス王の分家・アンジュー家が有していた南イタリアのナポリ王国の王位継承権を主張したのである。英国との百年戦争（1337-1453）に勝利して国内の権力を掌握し、強力な常備騎兵軍と砲兵隊を備えたフランス王によって分裂状態のイタリア諸国はたちまち蹴散らされ、ポテンターティの一つで、ルネサンスの中心地ともいえるフィレンツェ共和国は戦わずしてフランスの軍門に下り、ナポリ王家アラゴン家は逃亡した。これ以降、小国の集合体であったイタリアは戦乱に巻き込まれ、最終的にはフランスとそのライバルであったスペイン（神聖ローマ帝国）の影響下に置かれてしまう。もはやイタリアの都市共和国や小君主国は大国フランスとスペインの力に抗しきれず、その主体性を失い、次第にヨーロッパの政治と文化の中心は北へと移っていくのである。1494年を「イタリア・ルネサンスの終焉の年」とみる意見も、うなずけるものであろう<sup>4)</sup>。

1494年に始まる、絶対王政国家に対するイタリア都市国家の没落を象徴するような言葉が、フィレンツェの外交官であったフランチェスコ・グイッチャルディーニ Francesco Guicciardini の『イタリア史 *Storia d'Italia*』（1561年刊）にある。

フランス人たちは青銅製のより役に立つものを造ったが、それはカンノーネ *cannone*（註：カンノン砲、砲身の長い大砲の一種）と呼ばれ、以前のような石の砲弾ではなく鉄製の砲弾を用いる。鉄の砲弾はより大きく、大変重いことにおいてはこれまで使われてきた砲弾とは比べ物にならない。カンノーネは車両に乗せて運搬される。かつてのイタリアでの習慣のように牛で引くことはなく、馬で引っ張る。その速度は、人の歩みやこの種の任務に使われるもろもろの兵器に匹敵するので、軍隊が進撃す

るのとほとんど等しい。そして城壁に対して使用する際には、信じられないほど素早くしっかりと設置される。砲撃と砲撃の間隔は大変短く、強い威力をもって濃密に打撃を与えるので、かつてイタリアでは何日もかかったことが、ほんの数時間で成し遂げられる。都市に対してカンノーネやより小型の砲が用いられるのに劣らず、この人間的というより悪魔的な道具は平原でも使われる（拙訳<sup>5)</sup>）

また、グイッチャルディーニの友人で同僚であった政治思想家ニコロ・マキアヴェッリ Niccolò Machiavelli も次のような言葉を残している。

ある君主が、傭兵軍のうえに国の基礎を置けば、将来の安定どころか維持もおぼつかなくなる。というのは傭兵は無統制で、野心的で無規律で、不忠実だからである。（中略）今日のイタリアの没落は、永年にわたって傭兵軍のうえにあぐらをかいてきたのが、原因に他ならない。彼ら傭兵も、かつては特定の人に仕えて、それなりに成果をあげ、互いに競いあって、勇猛果敢ぶりを発揮したのだったが、外国軍が来たとき、化けの皮がはげてしまった。そこで僞王シャルルは、イタリアをチョーク（白墨：筆者）一本でまんまと占領することができたわけである<sup>6)</sup>

こうした文章は、フランス軍が1494年に全く新しい軍事技術（＝フランス軍のカノン砲）でイタリアを侵略したという印象を、現代まで長く与え続けてきた。そしてこれこそ、いわゆる新しい築城術が発達・普及するきっかけだったという説明が、軍事史のみでなく、他の分野でも広く受け入れられてきた。この「カノン砲の衝撃」説は、ニコロ・マキアヴェッリの他の著作にもみられ、こうした「衝撃」へのリアクションとしての「築城術の改良」という考え方をより受け入れやすくしてきた。

「衝撃」によって築城術が改良され始めたとする考えは、とりわけ築城術の改良が、国家システムや社会制度の近代化をもたらしたと考える、ジェフリー・パーカー Parker のような「軍事革命 *Military Revolution*」を主張する軍事史家に多くみられる<sup>7)</sup>。しかし、こうした技術の発達史観はあまりに単純すぎる。軍事史家の技術観を、技術を「ブラック・ボックス」（内部の働きは

何の関心も引かないシステム)として扱おうと批判したホール自身も、ルネサンス期イタリアの築城術については、火器の発達・普及によって築城術の改良が引き起こされ、さらに築城術が包囲戦術を変化させたという考えを肯定し、築城術の内部の働きには何の関心も示さないという矛盾を露呈している。<sup>8)</sup>

城砦攻撃用の火器が改まることに応じて城砦の防御力が強化され、防御力強化へのリアクションとしてまた攻撃のための包囲戦術が変化するという、攻撃と防御の「シーソーゲーム」という考え方は、一面では正しいこともあるだろう。しかし、とりわけルネサンス期イタリアの築城術については、火器と城砦の間で「シーソーゲーム」が行われたという技術観のみでは説明できない現象が存在する。

少なくともマキアヴェッリやグイッチャルディーニが述べたような“カノン砲の衝撃”以前に、築城術の変化の兆しは表れているということは複数の研究者によって認められている。<sup>9)</sup> フランチェスコ・ディ・ジョルジョが築城術における火器への対応を唱えたのは遅くとも1480年代のことである。この時期のイタリアでは、火器の改良と軍隊への普及は暫時進展中であった。火器は少なくとも1460年代までに包囲戦では一般的な武器となり、1480年代には包囲戦の主役となりつつあった。また、当時の戦争では新旧の火器が混在して使われている状況が長く続いており、パーカーなどの軍事史家のいうような築城術に対して急激な変化を促す火器技術の「ブレイクスルー」が1494年に起こったとは考えにくい。

このように、15世紀から16世紀にかけて火器は新旧が混在して用いられており、たとえば「カノン砲」のような新しい強力なものが発明されても、それが一度に旧式な火器全てを軍隊の装備一覧から駆逐してしまうといったことは起こっていない。軍隊が装備する火器の更新は一様に行われていったわけではないにも関わらず、建築家による「火器に対抗するための築城術」の研究・考察は、15世紀中期から16世紀中期にかけて急速に推し進められていく。こうした錯綜した状況が繰り返される中で、単に「攻撃と防御の技術が相互に競争しあったから」というだけでは、イタリアの建築家たちがあれ

ほど熱心に築城術を研究し続けた理由は説明できないし、ましてやそうした考察が稜堡式築城へと結実する理由も理解できない。

つまり、これまでの軍事史・軍事技術史は、攻撃側と防御側が常に相手の優位に立とうと競争し続けるという史観にとらわれてきたのではないか。だが、たとえ軍事技術といえども、「攻撃側と防御側のシーソーゲーム」という現象で全てを説明できるわけではないのである。そこで筆者は「シーソーゲーム」以外の原因に注目して、築城術の変遷をたどることにする。

本書は火器と築城術の発達史をたどり、変化をもたらした要因を探っていく。そして15世紀から16世紀へと向かって、軍事技術に対する建築家の要求や想定が変化するに従い、戦争および戦争を遂行する上での戦略そのものへの認識まで変化していったことも論証する。とりわけ築城術が戦争における防衛戦術・防衛戦略に密接に結びついた技術である以上、築城術の変化はそうした防衛戦術、防衛戦略の変化をももたらすものであった。それゆえ、前半の章で建築家たちによる築城術の変化・改良について論じたのち、後半の章では建築家たちの軍事技術に対する認識や戦術・戦略思想がどのように変わっていったかを分析する。その変化は、軍事技術によってのみ引き起こされたものでないことは明らかである。そこには当時の社会状況、戦争の推移、そしてイタリア・ルネサンスの舞台となった都市国家の終焉といったさまざまな要因が関わっていた。築城術をめぐる議論も、単なる技術論を越えた拡がりを持つようになっていく。そこで最終章では、政治思想、とりわけルネサンスを代表する政治思想家マキアヴェッリの国防論をとりあげ、建築家の技術論と比較することで、16世紀のイタリアの国家安全保障に関する論争の一端を解明することを試みる。

1) *The Military Revolution Debate* (ed. Rogers, C. J.), Boulder, Westview Press, 1995.

2) ホール、バート・S(市場泰男訳)『火器の誕生とヨーロッパの戦争』、平凡社、



1999年、13頁 (Hall, B. S., *Weapons & Warfare in Renaissance Europe*, Baltimore, The Johns Hopkins University Press, 1997)。

3) Mallett, M. E. & Hale, J. R., *The Military Organization of Renaissance State: Venice. c.1400 to 1617*, Cambridge, Cambridge University Press, 1983, p.420.

4) 軍事史家C・オーマンはその著作において軍事史における中世と近代の境を1494年の戦役においた。G・パーカーも同戦役を軍事史の一大転換点であり「軍事革命」の始まりであるとしている。詳細は以下を参照。Oman, C., *The Art of War in the Middle Ages*, London, Greenhill Books, 1998 (first published, 1937); Oman, C., *The Art of War in the Sixteenth Century*, London, Greenhill Books, 1999 (first published 1937); パーカー、ジェフリ(大久保桂子訳)『長篠合戦の世界史——ヨーロッパ軍事革命の衝撃1500-1800年』、同文館、1995年。

5) 原文は以下を参照。Guicciardini, F., *Storia d'Italia* (a cura di E.Mazzali), voll.3, Milano, Garzanti, 1988, vol.I, cap. XI, p.92.

6) マキアヴェッリ、ニッコロ(池田廉訳)『君主論』(『マキアヴェッリ全集』I)、筑摩書房、1998年、41-42頁。

7) パーカー、1995年、15-25頁。

8) ホール、1999年、254-256頁。

9) Hale, J. R., *The Early Development of the Bastion: an Italian Chronology c.1450-c.1534*, in. *Renaissance War Studies*, London, The Hambledon Press, 1983; Pepper, Simon, *Castles and Cannon in the Naples Campaign of 1494-95*, in. *The French Descent into Renaissance Italy, 1494-95* (ed. Abulafia David), Variorum, Hampshire, 1995を参照。

## あとがき

イタリアの多くの都市は、中世からルネサンスに建てられた城壁をさまざまな形で残している。城壁そのものは近代の都市拡張で取り壊されたとしても、いまなお城壁内だった街区は歴史的景観を残しているし、城壁は外周道路として、城砦や稜堡の跡地は公園・広場として使われている。それらには「城壁通り」や「稜堡広場」といった名前がつけられていることも珍しいことではないのだ。現代のイタリア都市の景観や都市構造は、本書で扱ったフランチェスコ・デイ・ジョルジョやペルッツィたちが活躍した時代と同じく、なお城壁・城砦によって特徴づけられているといえるだろう。これら「ルネサンスの軍事技術」の遺構は、いまでもイタリア人にとって生活と密着した存在なのだ。

現代のイタリア都市がかつての城砦の記憶をとどめている理由は、ルネサンスの城壁が、それ以後の都市発展と敵対する関係にはなかったからだろう。確かに、近代の都市にとって、砲撃を防ぐことのできない中世城壁は無用のものだったかもしれない。だがルネサンス以降、大砲の活躍する時代を迎えても、建築家が砲撃に耐えうる新しい築城術を考案した結果、都市を砲撃から守るための城壁を築くことができるようになった。こうして、中世が終わりルネサンスから近代へと時代が進んでも、イタリアの都市は城壁を都市の内外を分ける境界として保ち続けたのである。

城壁築造を含めたルネサンスの軍事技術は、都市の外形を規定しただけではない。都市発展の方向性をも決定づけていた部分がある。それは中世都市から近代都市への発展において、軍事技術がいかに大きな影響力を持っていたかを示している。軍事技術が都市発展を大きく左右した一例として、フェッラーラ市をあげたい。

『イタリア・ルネサンスの文化』を書いたドイツの歴史家ヤーコブ・ブル

クハルトは、イタリアのフェッラーラを「ヨーロッパで最初の近代都市 *erste moderne Stadt Europas*」と呼んだ。なぜならフェッラーラでは、歴代君主の指示によって規則的に設計された広大な市街地が作られ、増大する都市人口への対策がとられただけでなく、官庁の集中や、産業の誘致がおこなわれたからである。

フェッラーラの新市街建設は15世紀末に初めておこなわれた。実行した君主の名をとって「エルコレの拡張」と呼ばれるこの工事は、建築家ピアジオ・ロッセッティの計画の下、整然とした街路や広場、市内を流れる運河を整備し、稜堡を備えた新しい城壁で守るというものであった。そこにみられるのは、古代ローマに触発されたルネサンスの建築家が夢見てきた、「理想都市」の構想である。この「近代都市」フェッラーラで、16世紀には宮廷文化が花開くことになる。

そもそも、なぜこのような拡張がおこなわれたのか。この都市計画の起源は、1482年から84年の対ヴェネツィア戦争（本書第1章参照）にさかのぼる。このときヴェネツィアの攻撃を防ぐため、フェッラーラ旧市街の外側に急造された土塁防壁が、のちに拡張される新市街を囲む城壁となり、旧市街と土塁防壁を結ぶ道路が、新市街の街路となったのである。つまり、増大する人口に対応するという目的の裏には、将来の対ヴェネツィア戦に備えた城砦整備が隠されていたのだ。

さらにこの拡張計画を実行した君主エルコレ・デステは、運河とメインストリートが交わり、交通の便が良い町の中心地サン・ジュリアーノ地区に、多数の武器職人・大砲職人を雇用し定住させるという、一種の「軍需産業振興策」をおこなった。エルコレの後を継いだアルフォンソ・デステは、砲術を趣味とし、砲兵隊を率いて各地の戦場で活躍し、自慢の大砲を肖像画に描かせるほど大砲を愛した君主であった。その庇護下で騎士道文学の傑作『狂えるオランダ』を書いたアリオストは、アルフォンソのために砲弾をあしらった紋章をデザインしたといわれる。そこにはフランス語で「いつでも、どこへでも（砲弾を命中させる）」という意味の *Lieu et Temps* というモツ

トーが記されていた。このような大砲に理解のある君主を得て、エルコレ以降、16世紀を通じてフェッラーラは大砲産業の育成を怠らなかった。その結果、サン・ジュリアーノ地区には砲身鑄造や砲車製造を分業でおこなう建物が設けられ、火薬を量産できる人力機械が導入され、品質管理官を任命して大砲の品質を一定に保つ制度が作られた。こうしてフェッラーラ製の大砲は自国の軍隊だけでなく、イタリア諸国やスペイン・フランスにも供給されるようになった。つまりブルクハルトのいう近代的要素のうち、規則的な計画による市街建設・産業誘致は、まさに軍事的な動機によって促されていたのである。

フェッラーラは、軍事技術に特有の性格が、都市計画・産業振興にとって重要な役割を果たした顕著な例である。それは、軍隊や軍隊に関する組織の「命令・規律に従って組織的に活動する集団」という性格が、都市と産業に秩序を与えたからであろう。そもそも、なぜ「大砲」が産業として振興されたのだろうか。それはエステ家の当主が偶然砲術に関心があったというだけではない。16世紀の大砲製造には、産業として都市に誘致され、分業制や機械による生産や品質管理といった、近代的工場を思わせるシステムが導入される必然性があったのだと私は考える。

エステ家君主が大量の大砲職人をフェッラーラに定住させた理由はなにか。多くの職人を招くことで、より多くの大砲を作らせようとしたことだけではない。実は中世からルネサンスの砲兵隊員は、大砲職人が兼務していたことにもその理由がある。当時の大砲職人は、戦時には自分の作った大砲を持って戦地に赴き、砲兵として戦ったのだ。こうした職人と兵士の兼業は、当時のイタリア語にもあらわれている。「砲手」を意味する *bonbardieri* という言葉は、同時に「ボンバルダ（火器）を作る人」という意味でも用いられた。同様に、「火縄銃 *scoppietto* を作る人」と「火縄銃兵」はともに *scoppiettieri* と呼ばれたのである。つまりエステ家の職人誘致・定住策は、産業振興だけでなく、砲兵隊の増強と常備軍化という目的も含んでいた。そして、職人たちは部隊として戦うために、エステ家君主の命

令で平時から組織化されていた。だからこそ大砲製造に関しては、平時から職人を定住させ、組織化しておく必要が存在したのである。砲手を集めて砲兵隊を編成するという行為が、同時に職人を組織化することと同義だったがために、組織化された軍隊制度が大砲の生産システムに反映されたのだと考えなければ、16世紀という早い時期に分業・品質管理といった生産の効率化＝「近代化」がおこなわれた理由は説明できないだろう。

だが一方で、「大砲職人が砲手を兼務する」という前近代的な慣習がなければ、こうした産業誘致の契機は生まれなかったともいえる。つまり、「軍隊の持つ組織や合理主義が、中世の職人組合にとってかわった」などと安易に説明するわけではないのである。こうした合理と非合理が入り交じった状況から、次の時代へと進む原動力が生まれてくるところが、軍事技術史を研究する上での困難さであり、私に関心を惹かれる部分でもある。

本書で論じたフランチェスコ・ディ・ジョルジョの「擬人論」や「側面射撃」が、人文主義思想から得た着想でありながら軍事的合理性を備えた築城理論であったように、軍事技術の発達にはさまざまな矛盾した理論や価値観が関わっていた。合理主義がもっとも幅を利かせそうな軍事の分野においてすら、単純に中世の非合理主義が合理主義へと解消されることで近代化を果たしたわけではないという点を見すえて、今後も「ヨーロッパの近代化とはなにか」という問題に挑み続けたいと思っている。

私がそもそも城砦や大砲といったことに興味を持ったのは、学部生時代に触れた「軍事革命」論がきっかけだった。「軍隊と武器の発達が西欧近代化をうながした」という壮大なテーゼに心を動かされ、そのうちそうした「武器の発達」を担った人びととしての「建築家」に関心を持つようになった。こうして、イタリア建築家の軍事技術者としての側面に注目しながら研究するなかで書きあげたのが、本書の元となった博士論文「軍事技術者のイタリア・ルネサンス——火器と築城術の変遷：フランチェスコ・ディ・ジョルジョ・マルティーニからピエトロ・カターネオまで——」である。もともと

軍事技術に興味を持つきっかけとなった「軍事革命」論とは、かなり離れたものになってしまったという思いはあるが、軍事・戦争を通して近代とはなにかを考えようという試みの、筆者なりの1つの区切りとすることができた。

本書は「軍事技術と近代化」だけでなく、結果的にイタリア・ルネサンスの人文主義思想や政治思想、都市論、美学など幅広いテーマを扱わずにはおれなくなった。こうした分野全てについて、軍事技術と絡めて過不足なく論じることは、私の手に余る作業であった。本書中のそうした記述の不足・間違いや論述の偏りについては、それぞれの分野を専門とする方からの批判・指摘を頂けると幸いである。

本書の刊行にあたっては、京都大学の平成23年度総長裁量経費 若手研究者に係る出版助成事業による助成を受けた。そのほかにも、本書の刊行にさいしては、多くの方がたの助けがあった。お名前を全てここに列挙することはできないが、とりわけ京都大学大学院人間・環境学研究科の岡田温司先生には、博士論文の執筆から出版助成まで、さまざまなかたちでご助力を頂いた。そもそも10年前、イタリア語を学び始めて3か月にもならない学生だった私が、突然原典講読のゼミに出席して15世紀の建築書を読みたいと申し出たとき、こころよく受け入れてくださったのが先生である。ゼミの学生でもない筆者の研究を長年指導してくださったことに改めて感謝の意を表したい。また、出版事情が厳しいなか、本書の刊行を引き受けて下さった思文閣出版にも感謝したい。編集担当の田中峰人氏にはひとかたならぬお世話になった。心よりお礼を申し上げる。

平成24年1月20日

著者

## 人名索引

### ア行

アゴ스티ーノ・ディ・ピアチェンツァ	51
アテナイのティモン	208
アルフォンソ・ダラゴーナ(アルフォンソ2世)	40, 43-47, 51-53, 55, 56, 66, 85, 86, 92, 93, 96, 98, 101, 100, 111, 219
アルベルティ→レオン・バッティスタ・アルベルティ	
アレクサンダー大王	179, 194-196
アレックスandro・スフォルツァ	120
アレックスandro・チェザリーニ	171
アレックスandro6世(教皇)	168
アントニオ・ダ・サンガッロ	130, 167-169
アントニオ・ピッコローミニ	50
アントニオ・フィラレーテ	83, 115
アントニオ・フェデリギ	103
アントニオ・マルケージ	40, 87, 93, 95, 98, 131, 155
アントニオ・ラフレリー	95
アントネッロ・ダ・カプア	96
ヴァザーリ	169
ヴィテッロ・ヴィテッリ	217
ウイトルーウィウス	6, 69, 83, 85, 111, 113, 114, 116-119, 122-126, 128, 129, 139-144, 146, 152, 153, 171, 178-180, 183, 188, 189, 191, 194, 210, 217, 229-231
ウエゲティウス	125, 144, 146, 147, 157, 217
ヴェッキエッタ→ロレンツォ・ディ・ピエトロ	
ヴォーバン→セバスティアン・ル・プレストル・ド・ヴォーバン	
エティエンヌ・ドゥ・ペラク	95
エルコレ・デステ	40, 52
オッタヴィアーノ・ウバルディ	69
オルソ・オルシーニ	52

### カ行

カターネオ→ピエトロ・ディ・ジャコモ・カターネオ	
カルロ・アルマーティ	130
キケロ	216
グイッチャルディーニ→フランチェスコ・グイッチャルディーニ	
グイドッチョ・ダンドレア	103
グイドバルド・ダ・モンテフェルトロ	66

## 人名索引

グスタフ・アドルフ	227
グスティナ・スカリア	112
クリフォード・ロジャース	54
クレメンズ7世(教皇)	161, 220

### サ行

サツ、G	204
サンガッロ兄弟	167-170, 175, 177, 219
ジェフリ・パーカー	9, 10, 227, 228
ジェレミ・ブラック	228
ジギスムント	66
シクストゥス4世(教皇)	76
シジスモンド・マラテスタ	40, 44, 64, 75
ジャコモ・パリソト	51
シャポー、F	204
シャルル8世	8, 9, 216
ジャンピエロ・レオステッロ	43
ジュリアーノ・ダ・サンガッロ	130, 164, 167, 169, 174
ジュリアーノ・ダ・マイアーノ	86, 129, 131, 135, 139
ジュリアーノ・デッレ・ローヴェレ	169
ジョヴァンニ・ダ・カナーレ	53
ジョヴァンニ・デッレ・ローヴェレ	76
ジョヴァンニ・プレシャーノ	51
ジョヴァンニ・ミケーレ・ラッジェット	45-47
ジョルジョ・マルケージ・ダ・セッティニャーノ	131
ジョン・ホークウッド	25
スキピオ・アフリカヌス	208, 210
聖フランチェスコ(アッシジの)	17
セバスティアン・ル・プレストル・ド・ヴォーバン	35, 36

### タ行

大アントニオ→アントニオ・ダ・サンガッロ	
タッコラ→マリアーノ・ディ・ヤーコポ	
タリウス	195, 196
チーロ・チーリ	40, 87, 91, 155
チェーザレ・ボルジア	51, 208
ディエゴ・デ・ラット	24
ディノクラテス	179, 194
ドナート(砲手の)	51
ドミティウス・カルヴィヌス	208

## ナ行

ナヴァロ→ペドロ・ナヴァロ  
 永井三明……………38  
 ニコラス・アダムス……………103  
 ニッコロ・マキアヴェッリ……………9-11, 32, 33, 37, 49, 80, 137, 188, 196-212, 214-218, 220

## ハ行

バート・S・ホール……………5, 10, 14, 55  
 ハイナリヒ7世……………24  
 バッチョ・ボンテッリ……………40, 87, 100, 131, 155, 164, 169, 170, 176, 219  
 バッロンキ、A……………156  
 バルダッサレ・ベルツィ……………155-162, 165, 166, 168, 170, 171, 175-179, 182, 183, 187, 191-195, 197-202, 214, 218, 219, 229-231  
 バルトローニ……………44  
 バンドルフォ・ベトルッチ……………103  
 ハンニバル……………208, 216, 217  
 ピウス2世(教皇)……………42, 44, 51, 56, 79, 120  
 ピエトロ・ダ・モリン……………52  
 ピエトロ・デイ・ジャコモ・カタネオ……………  
 177-184, 187-189, 192-196, 198-202, 208, 210, 219, 227, 229, 230  
 ピエリ、P……………37, 38, 204  
 ピエロ・デッラ・フランチェスカ……………40  
 ピュロス……………208  
 フェッライオーロ……………47  
 フェッランテ(フェルディナンド1世)……………44, 50, 52, 84, 101  
 フェデリーコ・ダ・モンテフェルトロ(フェデリーコ3世)……………  
 40, 44, 47, 51, 53, 55, 56, 64, 66, 67, 74-76, 84, 85, 91, 101, 103, 104, 111, 120, 219  
 フラ・ジョコンド……………96  
 フランチェスコ・グイッチャルディーニ……………8, 10, 32, 33, 216  
 フランチェスコ・ダンジェロ(通称ラ・チェッカ)……………132, 134  
 フランチェスコ・デ・ホランダ……………95, 96  
 フランチェスコ・デイ・ジョヴァンニ(通称フランチョーネ)……………  
 129-132, 134, 138, 139, 167  
 フランチェスコ・デイ・ジョルジョ・マルティーニ……………5-7, 10, 40, 51, 56, 63-70, 72, 75-77, 79-88, 91-106, 111-132, 134, 135, 137-148, 152-160, 162, 163, 165-167, 169-171, 174-177, 179, 180, 182, 183, 187-189, 199, 201, 202, 205, 208, 209, 219, 228-231  
 フランチョーネ→フランチェスコ・デイ・ジョヴァンニ  
 フリードリッヒ1世……………23  
 プリニウス……………158, 179  
 ヘール、J・R……………33, 34  
 ペドロ・ナヴァロ……………211, 212, 214-218, 220

ベルツィ→バルダッサレ・ベルツィ

## マ行

マイケル・デシエルト……………66  
 マイケル・マレット……………38, 42, 205  
 マイケル・ロバーツ……………227, 228  
 マキアヴェッリ→ニッコロ・マキアヴェッリ  
 マリアーノ・デイ・ヤーコポ(通称タッコラ)……………65, 66, 112, 113  
 マリン・サヌード……………42, 44, 92, 93  
 マルクス・グラエクス……………158  
 マルケルス……………208  
 ミケランジェロ……………39, 175, 218  
 ミリミートのワルター……………28

## ヤ行

ヤーコポ・ピッチニーノ……………50  
 ユスティニアヌス……………188  
 ユリウス・カエサル……………208, 210  
 ユリウス2世(教皇)……………195, 196

## ラ行

ラ・チェッカ→フランチェスコ・ダンジェロ  
 リヴィウス……………204  
 ルカ・デイ・バルトロ・ダ・バーニョカヴァッロ……………103  
 ルカ・ランドウッチ……………44, 45  
 ルチアーノ・ラウラーナ……………40  
 ルドヴィコ・スフォルツァ……………39, 219  
 レオステッロ……………44, 49, 56  
 レオナルド・ダ・ヴィンチ……………30, 39, 51, 153-155, 173, 174, 219, 220  
 レオン・バッティスタ・アルベルティ……………83, 115, 178, 179, 184, 189-191, 199, 210  
 ロドリジオ・ヴィスコンティ……………24  
 ロベルト・ヴァルトゥリオ……………65  
 ロベルト・オルシーニ……………50  
 ロベルト・ダ・サンゼヴェリーノ……………51, 53  
 ロベルト・マラテスタ……………53  
 ロムルス……………190  
 ロレンツォ・デイ・ピエトロ(通称ヴェッキエッタ)……………103, 112, 113  
 ロレンツォ・デイ・メデイチ……………86, 131

## 地名索引

### ア行

アヴェッツァーノ	128, 132, 134
アザンクール	21, 25
アッカディーア	50
アドリア海	88
アレクサンドリア	179, 194
アレツォ	23
イーモラ	34, 131, 134, 135, 137
イスキア島	93
イングランド	25, 135, 137
ヴァレッタ	35
ウェールズ	25
ヴェツレトリ	53
ヴェネツィア(共和国)	38, 41, 48, 51, 52, 101, 193, 195, 196
ヴェルデイトゥーロ	50
ヴェローナ	122
ヴォルテッラ	44, 131, 135, 137
ウルビーノ	64, 67, 84, 85, 93, 101, 112, 113, 127
エジプト	179
エミリア=ロマーニャ(州)	34, 129, 152
オートラント	41, 45, 46, 84, 86-89, 91
オスティア(砦)	164, 169, 170, 174, 176
オランダ	36
オルベテッロ	103, 178

### カ行

カーリ(砦)	66, 72-74, 83, 132, 134
ガエタ(城)	93, 96
カスタニャロ	25, 30
カステル・ヌオーヴォ(マスキオ・アンジョイーノ)	92-95
カストロヴィッラーニ	97, 98
カゾーレ・デルサ(砦)	103, 104
カッセル	26
カプリ島	93
カラブリア(州)	43, 86, 96-98, 100, 104
カリアーティ	99

## 地名索引

ガリーボリ(砦)	87-89, 91, 97, 98, 100
ガルガーノ半島	88
カンパニア(州)	86, 91, 93, 94, 97, 152
カンバルディーノ	23
キアーナ渓谷	103
教皇庁(教皇領)	41, 86, 193, 211
ギリシャ	190
グラダーラ	34
クレシー	21, 25, 26, 29
クレモーナ	51
グロッタフェッラータ	167
コスタッチャーロ	66-69, 79, 82, 145
コッレ・ヴァル・デルサ	164, 167
五稜郭	36
コリリアーノ	97, 98
コルトレイク(クルトレー)	21, 25, 26
コンスタンティノープル(イスタンブル)	193

### サ行

サッソコルヴァーロ(砦)	67, 69-71, 74, 77
サッソフェルトリオ(砦)	66, 69-71, 74, 88
サトゥルニア	103
サルザーナ	132, 138
サルザネッロ(砦)	132, 134, 135, 167, 173, 174, 176
サルテアーノ	102
サンコスタンツォ	67, 72, 75, 76, 88, 118
サントアンジェロ(城)	167
サンテルモ(城)	92, 93, 100
サンレオ(砦)	67, 80-82, 84, 106, 132, 138, 170, 173, 174, 176, 202, 210
シエナ(共和国・市)	23, 40, 63, 65, 102-104, 112, 113, 131, 155-157, 161, 165, 166, 169, 170, 177, 178, 202, 214, 218, 231
スイス	25
スクルコラ・マルシカーナ	128, 132
スコットランド	25
ステラタ	53
スペイン	8, 36, 178, 193, 195, 196, 204, 211, 217-220, 229
セスタ	103
セッラサンタボンディオ(セッラ)(砦)	66, 77, 78, 87, 91, 154
セニガッリア	34, 131, 138
ソルボロンゴ	44

## タ行

ターラント	87-89, 91, 97, 98, 100
タヴォレート(砦)	66, 77, 87, 91
タラモーネ	103, 178
タリアコッツォ	128, 132
チヴィタ・ヴェッキア(砦)	175
チヴィタ・カステッラーナ(砦)	167-170, 174, 176
チェッラート	103
チェリニョーラ	54, 211
ドイツ	24, 36
トスカーナ(州)	86, 129, 152, 164
トラモンターノ(城)	89
トルコ	46, 86-88, 101, 193, 195, 196
トレヴィーゾ	96
トロイア(砦)	50

## ナ行

ナポリ	85-87, 92, 95, 102, 104, 121, 142
ナポリ王国	8, 41, 43, 66, 84, 86, 87, 94, 97, 100, 129
ナポリ市	88, 91, 93, 96, 100
ネットゥーノ(砦)	167, 168, 174-177

## ハ行

函館	36
バノックバーン	21, 25
バリ	173
バリッツィ	99
ハンガリー	86
ピサ	207, 209
ピッツォ(砦)	97
ファーノ	44, 76
フィカローロ	51, 52
フィレンツェ(共和国)	8, 23, 24, 28, 41, 44, 129-132, 134, 138, 161, 167, 169, 211, 212, 214, 215, 218
ブーリア(州)	43, 45, 50, 86-88, 97, 98, 100, 105, 152
フェッラーラ(公国)	41, 43, 52, 193, 195, 196
フォッソンプローネ(砦)	67, 72-75, 79, 82, 98, 100
フォッコニカ	103
フォルリ	34, 131, 134, 135, 137
フラミア街道(フラミア道)	66, 67, 72, 73, 82
フランス	8, 26, 36, 135, 137, 178, 193, 195, 196, 204, 211, 217-220, 229

フランドル	25
プリンディシ(城)	87-89, 97, 98
フロントーネ(砦)	67, 72, 74, 75, 79
ペーザロ	131, 135
ベルヴェデーレ(砦)	98-101
ベルギー	36
ベルシア帝国	195, 196
ポッジボンシ	44
ポッジョ・インペリアーレ(砦)	86, 167-170, 174
ポルト・エルコレ	103, 178
ボルドラーノ	51
ボワティエ	21, 25

## マ行

マテーラ	88, 89, 91
マルケ(州)	34, 64-66, 76, 81, 82, 86, 97, 98, 100, 102, 104-106, 121, 131, 132, 142, 152
マレンマ	103
マンフレドニア	88
ミラノ	23, 30, 39, 52, 154, 219
メタウロ川	73, 82
メラーラ	53
モン・サン・ペヴェール	26
モンダヴィオ(砦)	44, 67, 76, 79, 82
モンタベルティ	23
モンテアクト	103
モンテサントジャンジェロ	88, 89
モンテフィオーレ	44
モンテプルチャーノ	103
モンテポッジョーロ(砦)	86, 131, 135
モントリオ・ロマーノ	51
モンドルフォ(砦)	67, 76-78

## ラ行

ラ・カステッリーナ	86
ラツィオ(州)	51, 152, 167
リーミニ	44, 53, 64, 74
リグーリア(州)	132
ルチニャーノ(砦)	103
レッジョ・ディ・カラブリア(レッジョ)	99
レニャーノ	23
ローマ	53, 66, 67, 128, 129, 156, 166, 167, 170, 190
ロッカ・インペリアーレ	99



ロッカ・シニバルダ	171, 175
ロッソ(城)	88, 89, 98
ロンバルディア(州)	43

## 事項索引

### ア行

アラゴン=アンジュー戦争	41, 42, 44, 48-50, 52
『アラゴン朝ナポリ年代記』 <i>Cronaca della Napoli aragonese</i>	46, 47
アルキブジオ(アルキブージ) archibugio	30, 47, 53, 76, 157
アントロポモルフィズモ antropomorfismo→擬人論	
『イタリア史』 <i>Storia d'Italia</i>	8, 32
イタリア式築城 trace italienne→稜堡式築城	
ヴェネツィア=フェッラーラ戦争	41-43, 47, 49, 51, 52
『ヴェネツィア=フェッラーラ戦争備忘録』 <i>Commentari della guerra di Ferrara tra li viniziani</i>	42
オートラント戦争	41, 45, 84
『オートラント戦争史』 <i>Historia della guerra di Otranto</i>	46, 47

### カ行

角型稜堡 angled bastion	33-35, 68, 69, 75, 77, 79, 81, 84, 104, 105, 144-147, 168-170, 175, 177, 181, 184
カノン砲 cannone	8-10, 32, 44
カバンナート capannato	76, 144, 162, 164, 165, 202, 231
『カラブリア公日録』 <i>Effemeridi</i>	43, 56
キープ・ゲートハウス様式	135
擬人論	6, 7, 69, 70, 75, 79, 83, 91, 104, 115-117, 119, 141-143, 175, 179, 182-184, 229, 230
グアスタトーリ guastatori	52, 54, 55
軍事革命 Military Revolution	9, 227-229, 232
『軍事建築論』 <i>Trattati di Architettura Militare</i>	155-161, 165, 166, 171, 175, 179, 180, 183, 191, 192, 195, 197, 199, 219
『軍事について』 <i>De re militari</i> (ヴァルトゥリオ)	65
『軍事について』 <i>De re militari</i> (ウエゲティウス)	125, 144, 157
『君主論』 <i>Il principe</i>	37, 196-199, 204, 205, 211, 215, 218
『建築』 <i>L'architettura</i>	177, 178, 184, 187, 188, 192-194, 196, 199, 219, 227
『建築十書』 <i>De architectura</i>	84, 111, 113, 124-129, 139, 140, 143, 146, 171, 179, 183, 229, 231
『建築について』 <i>De re aedificatoria</i>	178, 179, 189
『建築四書』 <i>I Quattro Libri dell'Architettura</i>	177, 178, 192, 193, 199, 219
『建築論』 <i>Trattati di Architettura</i>	56, 64, 66-72, 76, 77, 81, 83, 84, 91-94, 104, 105, 111-125, 127, 128, 138, 139, 142-145, 148, 152-160, 162, 163, 166, 171, 179, 180, 183,

188, 202, 209  
コルターネ cortane .....157  
コルニーチェ(軒蛇腹、コーニス) .....93, 96, 104

#### サ行

シウムメトリア symmetria .....6  
神人同形説→擬人論  
スカルパ scarpa .....93, 94, 96, 97, 100, 104, 131, 135, 158  
スコピエット scoppietto .....30, 31, 44, 53  
スピングアルダ spingarda .....32, 47, 53, 157  
『戦争の技術』 *Arte della guerra* .....80, 137, 204-208, 211, 212, 215-218  
側面射撃 .....68, 69, 72, 76, 77, 79-81, 84, 104-106, 121-129, 131, 132, 134, 135,  
138-141, 143-148, 152, 153, 158, 160-171, 174-177, 183, 184, 187, 209, 230

#### タ行

大塔 torrione .....122, 127, 132, 134, 144, 145, 230  
チェルボッターナ(チェルボターネ) cerbottana .....32, 157  
チッタデッラ cittadella .....77, 78, 97, 142, 160, 180  
『ディスコルシ』 *Discorsi sopra la prima deca di Tito Livio* .....  
196, 198, 199, 202, 204, 205, 207, 211, 220

#### ナ行

『日録』 →『カラブリア公日録』

#### ハ行

『博物誌』 .....158  
バサリスコ basalisco .....32  
パッサヴォランティ passavolante .....32, 47, 53, 157  
バツィ戦争 .....41, 44  
半月堡 rivellino .....171  
『備忘録』 *I Commentari* .....42, 56, 79  
百年戦争(1337-1453) .....8, 19, 21, 22, 25  
『フィレンツェ築城検視報告書』 *Relazione di una visita fatta per fortificare Firenze* .....  
211-218  
フィレンツェ派(フランチョーネ派) .....  
130, 131, 134, 135, 137, 138, 142, 152, 153, 155, 165, 167, 168, 230  
フチャーレ fucile .....30, 44  
『法学提要』 *Institutiones* .....188, 202  
ボンバルダ bombardata .....28, 43, 51, 53, 72, 119, 157

#### マ行

マスキオ maschio(主塔) .....

#### 事項索引

70-72, 74, 76-79, 83, 84, 87-89, 91, 97, 98, 100, 135, 137, 169  
マルティニーニ派 .....87, 91, 92, 94-102, 105, 130, 137, 152, 153, 155, 160, 165, 169, 175, 187  
メザネッレ mezanelle .....157  
モルタイオ(モルターロ) mortaio .....32, 157

#### ヤ行

矢狭間胸壁 .....94, 96, 97, 131, 158  
『雄弁家について』 .....216  
『要塞攻囲論』 *Traite de l'attaque des places* .....35  
『要塞防御論』 *De la defense des places* .....35  
傭兵隊長 condottieri .....13, 37-42, 47-49, 52, 54-57, 103, 120, 205, 228, 231

#### ラ行

理想都市 città ideale .....5-7, 115, 117, 175, 179, 180, 187  
リバルディ ribardi .....29  
リボートカン ribaudequin .....29, 30  
稜堡 bastione .....6, 33-36, 66, 68, 70, 71, 74, 75, 77-79, 82-84, 88, 95, 98-100, 105,  
116, 120-122, 124, 129, 132, 134, 137, 139, 140, 145-147, 152-155, 161-163, 165-168,  
171, 174-178, 180-183, 187, 202, 206, 214  
稜堡式築城 .....6, 7, 11, 13, 35-37, 54, 68, 83, 105, 106, 114-118, 121, 122, 130, 146-  
148, 152, 153, 160, 163, 166, 174-177, 184, 187, 220, 230-232  
ローマ劫略 Sacco di Roma .....156, 161  
『ローマ史』 .....204  
『ローマ法大全』 .....188

◎著者略歴◎

白幡 俊輔(しらはた・しゅんすけ)

1978年大阪府生まれ。2001年同志社大学文学部卒業。同年、京都大学大学院人間・環境学研究科修士課程入学。2004年イタリア・ローマ大学「サピエンツァ」建築学部留学(2006年帰国)。2010年京都大学大学院人間・環境学研究科博士後期課程修了。京都大学博士(人間・環境学)。現在、関西学院大学客員研究員。専門、軍事技術史。

[主要論文]「中世城壁から後倭式城郭へ——15世紀イタリアの軍事技術・建築家・君主——」(今谷明編『王権と都市』思文閣出版、2008年)「フランチェスコ・デイ・ジョルジョの『イタリア式築城』成立への影響——大砲・築城・都市計画の視点から——」(『イタリア学会誌』2009年)「15世紀イタリア傭兵隊長の戦術と戦略」(『西洋中世研究』2010年)他。

くんじぎじゅつしゃ  
軍事技術者のイタリア・ルネサンス  
——ちくじょう たいほう りそうとし——  
築城・大砲・理想都市——

2012(平成24)年3月20日発行

定価：本体5,600円(税別)

著者 白幡俊輔

発行者 田中 大

発行所 株式会社 思文閣出版

〒605-0089 京都市東山区元町355

電話 075-751-1781(代表)

印刷 亜細亜印刷株式会社  
製本

©S. Shirahata

ISBN978-4-7842-1625-3, C3022